

「眩しいばかりの日差し、募る想いは、酬い」

作 はまの省蔵

人物表

松尾雪乃 主人公 雑誌編集者

山下太一 小説家 学校教員

山下スズ 太一の妻 病弱

若松玄太 太一の家の人 隣家

若松まつ 玄太の妻

相良良一 雪乃の上司 雑誌編集者 雪乃の前任

編集長 雑誌編集部 編集長

夫婦の愛が、

人間の根源的な苦難を乗り越える力と
なり得るのかもしれない

しかし、

夫婦関係において、

苦難は絆を深めることもあれば、

予期せぬ形で関係を揺るがすこともある

はまの省蔵

序章

第一場 プロローグ

波がきらきらと輝き、浜辺に小さな波が打ち寄せてくる

日差しが照り付ける中、沖には小さな漁船が波に揺られながら漁をしている

一人の女性が砂浜に立ち、眩しそうに海を見つめている

手には日傘を持っている

雪乃 先生のほかぁ・・・

（小さくつぶやくように）

雪乃 私は、ちっとも輝いてなんかない。むしろ、陰がお似合いだった。

雪乃 がしゃがんで、砂浜の貝を見つけてしゃがむ

貝をすくい上げて、手のひらの上にのせる

雪乃 あなた（貝）も、いつもは砂浜に潜っているものね。そして、口をつぐんでじっとしているのね。砂の表面に出て来たときは、きらきらとしているけど、いつもは砂の中。砂の中では、口も開けられないから、何も言えないわよね。そこがあなたの居場所だもの。海の中がいい？

じっと貝を見つめる雪乃 やがて、そっと海の中に貝をおく

雪乃 そこは、自由な世界よ

海の中を波に揺れる貝を、雪乃が見つめる

相良が、砂浜を静かに雪乃の背後から近よる

少し離れたところから雪乃を少しみつめ立つ相良

相良 松尾・・・そろそろ、駅に行く時間だぞ

雪乃が相良に振り向くことなく海を見つめ立ち上がる

相良は、あきらめたような顔で雪乃を見ている

相良 先生とは、博多本社の編集部が初対面だったっけ？あれからもう、5年か……。長崎の支社に転勤になって3年。月日が経つのは早いな。

雪乃 ええ、あっという間の3年でした。

浜辺でたたずんでいる二人

第一章 5年前の雪乃と太一の出会い

第一場 編集部

ソファで話す太一と編集長

太一は新作の小説を編集部に持ち込む

小説を読んでダメ出しをする編集長

仕切られたパネルの向こうの離れた席でやり取りを聞く松尾雪乃

雪乃 新人賞で賞を取ったといってもまだまだ、小説の世界では新人。編集長がそう簡単

に受け取るわけないものね。小説家の第一関門。プロの世界での主従関係をとことん頭に
刻み込ませるための編集長のいつものやり方。まあ、仕方ないわ。

横目で二人をちらりと見る雪乃

太一 どこがよくないのか？自分ではわかりません

編集長 それは、自分で見つけてもらわないと。あくまでも、作者と読者の書き方を指南す
ることじゃないんだからね。あくまで、小説家を書いた作品を世に送り出す。それを読む
読者がいる。その間を取り持つのが編集者の仕事なんだよ。だから、編集者が面白くない
と思えば、読者の元に送り出すわけにはいかない。それがいまの君の状態だよ

太一 自分でもわからなくなっていました

編集長 ……

太一 このままでは、帰っても筆は進まないと。

編集長 松尾君、ちょっと、こちらに来てくれないか

雪乃 はい

雪乃の前に太一の原稿を投げ出す編集長

雪乃 読ませていただきます

しばらく、太一の原稿を読んだ後

雪乃 このままでは、私も掲載することはできないと思います

編集長 で、感想は？

雪乃 情景から浮かんでくるものが、まずありません。それに、感情移入も中途半端な感

じがします。なにかこう心に響いてくるものがないかと

編集長 山下君、ウチの松尾がさえこう言っているものを本にするわけにいかないだろう

太一 はあ・・・

編集長 いいかね。読者というものは、非常にシビアな生き物だ。我々は、常にその生き物と戦っている。反応がよければ部数が伸びる。反応が悪ければ部数が落ちる。この簡単な構図が我々の生命線なんだよ。松尾君は、この原稿を受け取る気になるかね？編集者として。

雪乃 残念ながら、受け取らずに帰ると思います

編集長 どこが悪いか？指摘するかね？

雪乃 いいえ、作品を生み出すのは、あくまでも作者。私が入る余地がないと思います。あえて入る余地があるとすれば、設定の間違いと校正ぐらいなものです。

編集長 だろ？山下君。これが出版社の編集部というものなんだよ

席を立つ編集長 ソファには太一と雪乃が座っている

しばらく、沈黙したままの二人

太一の顔には苦悩がにじみ出ている

雪乃 山下さん、わたしは山下さんの文章、嫌いじゃないですよ

(ト、小声で)

太一 はあ・・・

雪乃 それに、編集長があんな言い方するのも、あまりないですよ。いつも、持ち込みだったら、ぶっきらぼうに『ああ、ああ・・・』と、云うだけで、さっきみたいに力を込めて話したりしないんです。

太一 はあ・・・

雪乃 さっき、書き手の方に指摘はしなかったって言いましたが、実は作家の先生に意見を求められたら、結構感想を話して、内容を検討したりしますからねえ

太一 そうなんですか・・・僕の小説は、いかがでしたか？

雪乃 全部読んだわけではないですが、何かこう・・・

太一 何かこう？

雪乃 何かこう、盛り上がり欠けるんですよ

太一 はあ・・・

雪乃 淡々としたタッチが山下さんの良さかもしれませんが、逆にそれだけでは、読者の心に響かないかと

太一 そうですか・・・淡々と書いてますからね

雪乃 山下さん、奥様は？

太一 はい、おります

雪乃 奥様には、読んでいただいていますか？

太一 いえ、あまり読ませたりしないんです。たまに読んでも僕らしくて良いというだけで、特に感想を言ったりしないので

雪乃 奥様は、山下さんの小説に興味がないんですね

太一 いえ、逆で。僕の小説のことが縁で一緒になったくらいですから、僕の書いたものにはとても興味があると思いますよ

雪乃 山下さんの書いたものを信頼してるんですね。

太一 はあ・・・

雪乃 素敵な奥様・・・

太一 えっ？

雪乃 いえ・・・（ト、立ち上がる）では、がんばってください

席を立つ雪乃 立ち去る前にちらりと、太一をみる

原稿を見つめたまま、ソファに座っている太一

遠目に太一を見つめる編集長

第二章

第一場 太一宅

雪乃と スズの対峙

雪乃が太一の担当になって半年後

一人で太一宅に原稿を取りに行く

雪乃 こんにちは

縁側から、しばらく声をかけるが返事がない

雪乃 こんにちは

スズ 奥から足元がふらふらしながら出てくる

スズ あら・・・松尾さん・・・こんにちは

雪乃 こんにちは スズさん 山下先生 脱稿したご様子ですか？

スズ あいにく、お使いに行ったつきり、まだ帰ってきとらんとよ

雪乃 そうですか・・・

スズ そこで立ちっぱなしもなんやろうけん、さあさ中へどうぞ

雪乃 そうですか・・・では、縁側で待たせていただきますね

スズ お茶ば入るね

雪乃 スズさん お身体も大変ですからお構いなく

スズ いえいえ

スズ 台所へ下がる

雪乃 辺りを見回して

雪乃 先生 脱稿した頃かなと伺ってみたのですが・・・（台所に聞こえるように）

スズの声 すまんですね ご迷惑ばかりかけとーばい

雪乃 迷惑だなんて、これが仕事ですから

スズの声 松尾さん リンゴは好きとですか？

雪乃 リンゴ すごく好きですー

スズが剥いたリンゴを皿に入れ台所から出てくる

スズ さあさ どうぞ

雪乃 ありがとうございます

二人が静かに外を眺めながらリンゴを食べる

問

スズ 太一さんの小説は、評判はどうなんだろうか？

雪乃 山下先生の小説は、少しずつ読者が付いているようですね

スズ 読者ん方に読んでいただいとーんやなあ

雪乃 読者アンケートも返ってきているようすし

スズ どがん小説なんかしら？

雪乃 え？奥様は読んでないのですか？

スズ ええ・・・

雪乃 山下先生の小説が気にならないんですか？

スズ 読んでみたいやが、太一さんに言いづらいとすよ

雪乃 読ませてもらえばよいのに

スズ 太一さんはいつも締め切りぎりぎりで書き上げるし

雪乃 そうですね

スズ 書き上げると、松尾さんがいつも直ぐに持ってらっしゃるやろ

雪乃 あ、そうか・・・すみません 締め切りがあって

スズ そうやなあ

雪乃 原稿を編集部に持って帰って直ぐに校正作業に入るので

スズ 松尾さんは、お忙しそうかばい

雪乃 そうですね

スズ こちらん地方では他ん先生も担当しとーん？

雪乃 飛び回ってます。編集部は人手不足で

スズ あちこちに行くけん良かねえ

雪乃 ええ、取材もこの仕事の楽しみの一つで

スズ あちこちのうまかもんも食べたり？

雪乃 そうなんです。先日も鹿児島まで行って

スズ え？鹿児島までいらしゃるの？

雪乃 おいしいお肉を食べさせていただきましたまして

スズ そう、うまかばい

雪乃 鹿児島では、いろんな方に出会って、お話も伺ったり

スズ 鹿児島ん方んお話ば？

雪乃 鹿児島の方って優しい方ばかりで

スズ いろんな方に出会えるんやなあ

雪乃 そうなんです。

スズ 楽しか？

雪乃 楽しかったですよ

楽しそうに微笑む雪乃

スズ そう・・・

雪乃 ええ

スズがリンゴを一つ頬張る

スズ うらやましかばい

ト、うつむき加減に小声で

雪乃 ・・・・え？・・・あ、すみません

ト、小声でうつむく雪乃

間

ちらりとスズを見る雪乃

考え事をしながらリンゴを食べるスズ

雪乃 うふ・・・おいしそうに食べてますね・・・

スズ え？

雪乃 リンゴが好きなんですネ

スズ あ・・・これ、入院してるときに太一さんが持ってきてくれたりんごばい

雪乃 山下先生が？

スズ ええ・・・

雪乃 山下先生・・・優しい・・・

スズ 優しかねえ

雪乃 奥様 うれしそう

スズ そうと？

雪乃 うれしそう

スズ 入院中 太一さんがリンゴば持つてきてくれた時んことば思い出して・・・

雪乃 え？

スズ リンゴば剥こうとしたら、太一さんが自分で剥くつて

雪乃 リンゴを剥いてくれたんですね

スズ あん人 不器用やけん

はにかみながら微笑むスズ

スズ ところどころ皮が残ったり

雪乃 ふゝん

スズ 皮ば厚う剥いて凸凹になったり

クスクス笑いだすスズ

スズ うちん口元へ持つてきて食べさせようするけん

雪乃 お二人仲良し・・・

スズ 恥ずかしかけんやめてくれんつて、云うとに

雪乃 こちらが、恥ずかしくなります

スズ ばつてん、うれしゅうて

雪乃 うらやましいです

スズ え？

雪乃 あ！ごめんなさい

スズ うらやましか？

じつとスズを見つめる雪乃

雪乃 ……はい

じつと雪乃を見つめなおすスズ

スズ そう・・・

スズが縁側から外に歩き始める

スズ 人は、生きてる間にいろんな人に会えるばい

雪乃 はい

スズ こんな空に下にいろんな人が生きとーんやろうなあ

雪乃 そうですねー

スズ わたしも生きとー間に何人ん人に出会うんやろか

雪乃 これから先、たくさんの人と出会いますよ

スズ 松尾さんのごと元気な人とも

雪乃 元気だけが取り柄ですから

スズ が空を見上げ眩しそうに空を見つめる

スズ 元気が一番ばい・・・

スズ を見つめる雪乃

雪乃 が皿のリングを取ろうとする

雪乃 スズさんの剥いたリングが美味しいですね

音がしてスズの方を振り向く雪乃

雪乃 スズさん！

庭にしゃがみ込むスズ

スズを抱えようとする雪乃

雪乃 大丈夫ですか！

太一 が帰ってきて庭に駆けこむ

太一 スズ！

雪乃 があわてて二人から離れる

太一 スズ！

スズを抱える太一

雪乃 が縁側から、家の中を振り向き二人の様子をみつめる

第二場 太一宅（スズが入退院を繰り返して、二年近くが経つ）

太一の夕飯 雪乃とのひと時

外は、夕暮れ時となり、日が暮れようとしている

蝸が遠くで鳴いている

太一宅の居間で卓袱台の上に、小説の原稿と万年筆

太一が爪を切っている

思い立ったように、立ち上がり縁側に行き、塀の外を見回す

また、卓袱台の前に座り、原稿に目をやりながら、爪を切る

玄関の戸が開く音がして太一がふりむく

雪乃の声 ただいま帰りました

雪乃が玄関から居間に入ってくる

手には、買い物かごに、野菜や肉などのたくさんの食料品が入っている

雪乃 山下先生、待たせました。お腹空いたやろ、すぐ夕飯ば作るけんね

太一 いや、松尾君、買うてきたもんは台所に置いてくれ、後は自分で作るけん

雪乃 何ば言いよーんと？ 山下先生は、原稿に集中してくれん。締め切りまで、もう日にちがなかとですけんね。夕飯ば作る時間があつたら、筆ば進めてくれん

太一 そがんことば云うてん、松尾君が来る度に、夕飯ば作らせるわけにはいかんちゃろ

雪乃 よかばい、脱稿するまで待つのが仕事やけん、ただ待つとーくらいなら、山下先生、お食事は作らせてくれん

太一 いや・・・そりゃ

雪乃 それに山下先生、うちが買い物行く前から、全然筆が進んどらんばいうやなかと？ 山下先生、原稿に集中、集中

ト、云いながら台所に入っていく雪乃

太一が台所に入ったスズに呼びかける

太一 おーい、適当でよかけんな 昼から来た早々、部屋んかたずけばまでして、編集長に知れたら、おいがはらかかるけんな

雪乃の声 よかばい。編集長からは、原稿が上がるなら何でも手伝うてこいって言われとー

けん

太一 そうは云うてんな・・・

雪乃の声 山下先生、口ば動かす暇があったら、頭と手ば動かしてくれん

太一 こう・・・か？

ト、云いながら頭と腕をぐるぐる回し始める

雪乃の声 もう、山下先生ったら、そがんことじゃなくて（笑いながら）

太一 そうっさね

ト、また卓袱台の原稿に向き書き始める

間

若松玄太が庭先から縁側に入ってくる

台所の様子をうかがいながら

玄太 山下先生、山下先生、台所からよか匂いがしとーねー

太一 こりや、若松さん

玄太 今日は、若か女性ん手料理と？うらやましかねー

太一 今日も、編集者ん松尾君が夕げば作ってくるというけん

玄太 編集部員というんは、大変ばいなー。作家山下先生夕飯ん支度まで

太一 いやいや、こりや当たり前やなけん。普通せんばい

玄太 そりや、山下先生お人柄ってやつばいな

太一 人柄って、そがんことはなかとですよ

玄太 人柄じゃなかったら、山下先生良か男前さと？

太一 男前だなんて、そちらん方がもつとなかばい

玄太 うちん まつも云うとったつき 山下先生には何かしちやったくなるよな、何かこ

う、母性本能ばくすぐらるる

太一 まっさんには、いつも総菜んおすそ分けばいたいてほんなこつ助かつとー。米くら

いは炊くるんばってん

玄太 おいもそうばい

太一 おかずとなると不器用で、料理は苦手なもので、スズン漬けた漬物くらいしか、おかずは用意せんけん

玄太 男子というもんは、それが当たり前ばい。山下先生だけやなか。おいも、まつが居なかったら毎日毎日漬物で、体中がぬか漬け臭う・・・

太一 えっ？

玄太 いや、山下先生が決して、決してぬか漬け臭かわけじゃなく、世ん中ん男子たるもん米には、ぬか漬け・・・。確かに、確かに、うちん まつん料理は、美味かばい

ト、そこへ料理を作った雪乃が居間に入ってくる

雪乃 山下先生、待ったと。簡単なもんしか作れんが

玄太 いや、そがんことはなかよ。美味しそうばい

太一 いや、こりゃ、松尾君が僕んために

玄太 おおお、そうやったな。そん料理は山下先生ために。違うばい。うちん まつん手料理は、確かに美味かって。ばってんね、体型はこうで（両手まつすぐ下す）顔もこうで

（顔を両手で頬を押さえて）

太一 そがんことば云うたら、まつさんに、はらかれますよ

縁側にまつが入ってくる

玄太は気づいてない

まつ また、山下先生お宅に上がり込んで。確かにうちん料理は美味かにきまつとーやろ。

だばってん、こうで（両手まつすぐ下す）顔もこうで（顔を両手で頬ば押さえて）とは、なんか？

玄太 おまえ、聞いとったんか（驚いたように）

まつ 何、たまがつとですか？聞いとったんかじゃなかですよ。向こう三軒両隣に、筒抜けばい

玄太 いやそうじゃなくて

まつ そうじゃなくてやなかやろ？あんたは、今晚はご飯抜き

玄太 そがん・・・

まつ さあさ、帰るばい。どうもうちのがお邪魔しました

玄太 いや、あん、お邪魔しました

玄太とまつがお辞儀をしながら立ち去る

二人の様子を微笑みながら見送る雪乃と太一

太一 仲良き夫婦ばい

雪乃 ほんと、仲ん良かご夫婦やなあ

太一 ほんなこつ、仲ん良か夫婦ばい

雪乃 さあさ、山下先生、召し上がってくれんな

太一 ああ、松尾君ん分は？

雪乃 うちや結構やけん

太一 そがんことば云わんで一緒に食べよう

雪乃 一緒にだなんて・・・

太一 飯はな、誰かと一緒に食べるのが、美味かばい

雪乃 うちや、山下先生が美味しそうに食べてくるるんば見よーだけで満足ばい。さあ、召し上がれ

太一 そうか・・・では、いただきます

雪乃が太一の食べる様子を窺いのぞき込む

雪乃 どがんな？お味は

太一がしばらく黙々と食べる

雪乃 お口に・・・合うたと？

太一が箸を止めて雪乃を見る

太一 うまか！

雪乃 良かった！

胸をなでおろしながら安堵する雪乃

太一 誰かに飯ば作ってもらうっていうんは、よかもんばい

雪乃 うちも、一人暮らしで自分で作って食べてん、いっちょん楽しゅうなか

太一 そうばい、卓ば囲んで食べるのがやはりよか

雪乃 そうやなあ・・・

太一がうなずきながら食べている

雪乃がうれしそうにそれを見ている

太一 おかわり！

雪乃 はいはい

ト、茶碗を受け取りご飯を盛る雪乃 太一がその姿を、じっと見ている
うれしそうに、茶碗を受け取り食べ始め雪乃が微笑みながら見る

間

太一が夕飯を済ませ、食器を台所へと運ぶ雪乃

太一 料理はどこかで習うたんか？

雪乃の声 いえ、長崎の叔父ん家で中学生ん頃から掃除洗濯、高校生になってからは、夕飯
ん支度もしとったけん

太一 そうか・・・苦労したんばい

雪乃の声 居候やったけん、あたりまえばい

太一 そうは、云うてんな、学生で家事までやることは、普通やなかけんな

雪乃の声 叔父叔母には育てていただいとったけん

太一 そうか、そうばい・・・

ト、うなずきながら卓袱台の原稿を眺める

雪乃が台所から出てきて帰り支度をする

雪乃 では山下先生、明日原稿ば取りにきます。脱稿できとーごと

太一 ああ、そうばい、また明日

雪乃 男性編集者やったら、泊りがけで原稿ば待つんやろうが、うちやそうもいかんけん

太一 そうばい・・・

雪乃が帰ろうとするところで太一が雪乃の手首をつかむ

雪乃がおどろいてその手を放そうとする

雪乃 山下先生・・・

太一が立ち上がり雪乃を引き留めようとする

太一 もう少し、一緒に居てくれんか？

二人が見つめ合い押し黙る

そして、しばらくして雪乃を引き寄せ抱きしめる太一

雪乃 山下先生・・・困ります

太一 もう少しだけ・・・

やがて、雪乃は太一の肩に顔を寄せ、二人が強く抱きしめ合う

第三場 太一宅 （スズが最後に倒れた一か月後 退院し帰宅）

スズの羨望 まつの慰め

強い日差しが縁側にあたっている

縁側を拭いているスズ

まつがスズに総菜を持ってくる

まつ スズさん、お加減はどがんな？

スズ あら、まつさん、こんにちは

まつ 煮付けば沢山作ったけん、おすそわけば

スズ ありがとうございます

まつ 拭き掃除してん大丈夫と？

スズ 寝てばかりもしてられんけん

まつ しんどかったら、寝てくれんね

スズ そうするばい。さあさ、上がってくれん

縁側から上がるまつ

スズが拭き掃除を止めてまつを招き入れる

まつが総菜の皿をスズに渡す

スズの声 美味しそやなあ。まつさん、お返ししたかばってん、あいにくまだ、

まつ そがん、お返しなんかせんでん

スズの声 今、お茶ば入れるね

まつ 悪かねえ

台所から出てくるスズ

スズ かんころ餅しかなかけど

まつ うち、こんお菓子ばり好きばい

スズ そりゃ、よかった

スズがまつにお茶を勧め、外の風景を眺める

まつもつられて外を眺める

スズが強い日差しを眩しそうにみる

まつ 暑かねえ・・・

スズ 暑かねえ

まつ 日差しも強うなったね

スズ 眩しか

まつ 日差しがと？

スズ いろんなものがやなあ

まつ いろんなものがと？

スズ 太一さんには、苦労かけとるばい

まつ そがんことはなかと思うよ

スズ うちがもっと元気やったら

まつ スズさんのことが好いとーばい、苦労と思うとらんやろう

スズ そうやろうか？

まつ そうばい

スズ 迷惑ばっかりかけて

まつ 迷惑なんて思うとらんやろう

スズ 心配ばっかりかけて

まつ そんな心配も好いとーけんこそばい

スズ やな嫁と思うとらんやろうか？

まつ 面倒どころか、生きがいというか？生活ん一部というか

スズ 生きがい？

まつ 山下先生は、スズさんのために生きとーよ

スズ うちんため？

まつ そうばい スズさんのために生きとーよ
スズ そうやろうか？退院してからちよつと
まつ 退院してからちよつと？
スズ 以前に比べてなんとう
まつ ……
スズ 頼らんごとしとるんばってん……
まつ 頼ってよかんや？
スズ 頼りづらか雰囲気があつて
まつ 退院してから？
スズ ……
まつ そがんこと……は……
言いかけ表情を曇らせ口ごもる まつ
スズ 学校ん先生は、ちゃんと続いとるんやろうか？
まつ 昼から夜学ん授業に行つとーけん大丈夫やろう
スズ そうやなあ
まつ お家賃も最近はちゃんと入れていただいとーし
スズ いつもご迷惑ばかりで
まつ いえいえ
スズ 小説では、ご飯ば食べていけんけん
まつ 最近は、学校ん先生がお似合いばい
スズ 何か？変わったと？
まつ スズさんの治療費んこともあるんや？
スズ まじめに働いとるんやなあ
まつ 根はまじめな人やろう？
スズ うちん人 まじめやなあ。
まつ まじめなことは良かやなかと
スズ うちん人らしゅうなか……
まつ あがん良か人はおらんばい

スズ 良か人？

まつ スズさん想いばい

スズ そうなんやろうか？

まつ そうばい

スズ 病院から帰ってきて、自分ん家んような気がせんで

家の中を見回すスズ

まつ 山下先生とスズさんの家やなかと

スズ そうなんやけど・・・なんとのう・・・

まつ なんとのう・・・？

スズ 家ん中ん雰囲気の前と違う気がして

まつ ……

スズ 家ん中が整いすぎて

まつ 山下先生がスズさんの入院中がなばとったばい

スズ あん人がと？・・・

まつ そうやろう

スズ あんひとが？・・・

まつ ……

スズ うちがだらしなかばっかりに

まつ だらしなかなんて

スズ 眩しかねえ

まつ え？

スズ うちがもつとお元気やったら

まつ これからどんどん元気になるばい

スズ うちも、もう若うなかし

まつ スズさんがそがんこと言うたらうちなんて

スズ 思うごと動くる体やったら

まつ そがんこと言わんで

スズ あん人ん・・・思いがどんどんちぎれていくごたって

まつ 山下先生は、そがんことなかばい

スズ こんま、引き留めとけるんやろうか・

まつ 山下先生は、変わらずスズさんのこと

ト、まつの言葉を遮りながら

スズ こんまん生活があん人ん幸せば奪うていくばい

まつ スズさん！（強く遮り）

スズ あん人ん違う幸せがあるとしたら

まつ スズさんどん生活が幸せばい

スズ こがんうちがあん人ん幸せ？

ト、少し笑みを浮かべながら

スズ こがん病気がちでお荷物のうちがあん人ん幸せ？

まつ スズさん！

スズ うちと居てん、いっちょん幸せなんかやなか

ト、伏し目がちに

スズ、海の方を向き、手で顔を遮りながら

スズ あん海んきらきらした輝きが眩しか

まつ 眩しか？

スズ うちもあん海んごとなりたか

まつ ・・・

スズ きらきらとした海になれば、もっとあん人がうちば見てくれるやろうか・

まつ 山下先生は、スズさんのことばいつまでも見ようばい

スズ きらきらと輝く海が羨ましか・・・

スズとまつが海を見ながら押し黙る

太陽に照り付けられた海からの光が二人を照らしている

第四場 山下自宅前（雪乃が転勤）

雪乃、決意の別れの日 太一宅の前

正午 午前中の雨は小降りになって、ほとんど上がっている

まつがほうきで風で散らかった葉を掃いている

雪乃が山下宅にやってくる

雪乃 若松さん こんにちは いつも精が出ますね

まつ あら、松尾さんではないですか。しばらく、見んとでしたがお元気でしたか

雪乃 はい、山下・・・先生のお宅にご挨拶に

まつ 挨拶とは、何か？あつたのですか？

雪乃 はい、今度、博多の本社に転勤になりました

まつ 本社に転勤とは、すごくなかったですか。女ばってん、なかなかこつではないですか？きつと、栄転こつあるとではなかですか？

雪乃 いえいえ、そんなたいそうなことではないのですよ。支店も長いので定期的な人事異動です

まつ そげな、謙遜を。はあ松尾さんは、やり手の編集者ばってん。出版社の中でも期待されてるとですよ。

雪乃 そんなことはありませんよ

まつ 山下先生の家に通うこつ松尾さんは、何かこう、輝いて眩しか目でみよつとでした。同じおなごとして、うらやましかです。

雪乃 うらやましいだなんて

玄太が家から出てくる

玄太が松尾に気づく

玄太 松尾さんじゃなかとですか。お久しぶりです

雪乃 お久しぶりです。お元気でしたか？

玄太 わしは、この通り、元気はつらつオロナミンC

まつ こん人は、元気だけが取り柄で他になあんも取り柄がなかこつですけん。

玄太 おまん、なああんば云いよつとか。

まつ そげな、口答えるのが元気ありすぎやけんが

玄太　　そういうおまんも、口答えばかりするとやろ。

松尾が少し笑って

雪乃　まあまあお二人とも、お元気そうでなりよりです。松尾は、安心して本社に行けます。まつ　そげなこと、言わんとなつて下さい。寂しかですけん

玄太　　そうですばい。美人の松尾さんに会えんことなるとは、ほんにさびしかですよ。

雪乃　お二人にそう言っていたいで、松尾は幸せ者です。こうしてご縁あつてお知り合いになつたんですから

まつ　松尾さんも口がうまかとですね。ただのとりえもない夫婦ですけん、松尾さんとお知り合いにならせてもらうたんは、ほんにこちらこそ、おかげ様です

玄太　　そうばい、そうばい、こちらこそおかげさまですけん。

雪乃　ありがとうございます。今日は山下・・・先生のお宅にお菓子を買つてまいりましたの。お二人も一緒に。さあさどうぞ。

玄太　　それは、よかですね。おまんも、一緒に

まつが、うつむき加減にかぶりを振つて玄太を見る

玄太　　どげんした？

まつ　　あんた・・・

（ト、玄太を制するように）

玄太　　・・・ おおお、そうやつた、そうやつた。おいは、今から集会所に行くところやつた。松尾さん、ご一緒したかつたけん、用事があるけん。ここで失礼するばい

まつ　　そうですよ。あんたは、用事があるとでしょ。私もまだ、家の用事があるば、山下先生のところに行かれんとですよ。

雪乃　　そうですか。

玄太　　松尾さんも博多に戻つたら、よか男が多くおるけん、モテモテになるばい

まつ　　そうばい、そうばい　こげな田舎ではもつたないないばい

雪乃　　そんなことはないですよ

玄太　　田舎では、松尾さんは、眩しすぎるばい

まつ　　そうばい　同じおなごから見ても美人ばい

玄太　　こんなところにおらんと、早よう博多で、よか男児を・・・

雪乃 全然だめですね。スカートも履かないし、女らしさないんで

まつ そんなことはないですばい。

雪乃 そうですか？・・・

まつ ここによか男児はおらんですけん

玄太 そうばい、そうばい

ト、雪乃がにっこり笑って

雪乃 では、この辺で

玄太 そうばいね。松尾さん、それではお元気で。

まつ お元気で。

雪乃 お二人ともお元気で

雪乃が二人に会釈して太一の家の中に入っていく

玄太、まつが雪乃の後姿を見送る

まつ あんたも気が効かん男やね

玄太 なしてか？

まつ そうでっしょ。山下先生のところに雨の日の風の日も足げに通い詰めて、原稿はまだ
ですか？まだですかと、これとったでしよ？

玄太 それは、おいも知っとるばいが

まつ あんだけ、二人三脚で仕事ばしよったら、積もる話もあるばい

玄太 そうたい、積もる話もあるばい

まつ 山下先生の奥さんが倒れて入院ばしよった時には、山下先生の身の回りの世話ばし
よって、ほんなこつよく出来たおなごばい。

玄太 よく出来たおなごばい

まつ 夕飯の支度に、家の掃除洗濯。知らん人が見たら、松尾さんのことを奥さんと思うく
らいやったけんね

玄太 そうばい、郵便屋さんが山下先生のところから出てくるときに、首ばかまつとったん
で、どげか？しましたか？尋ねたら、郵便屋さんが山下先生の奥さんが前に来た時と変わ
つとるというばってん、

まつ 郵便屋さんが云よつとか？

玄太 いや、あん人は出版社の編集者ですたいと言ったら、そげな風に見えんとですよ。『うちの山下がお世話になっとります』ば云うばいが、仲睦まじき夫婦にしか見えんかったと。

まつ そげなことがあったと？

玄太 一緒に過ごす時間が増えたら、情も映るというけんね

まつ 情も映るということは、どげんこつかね？

玄太 いやまあその・・・

まつ どげんした？

玄太 あの二人に限って・・・

まつ なんば考えよつとか？

玄太 つまりそのな・・・

（玄太の言葉を遮るように）

まつ そうたいね。うちもそれは心配しとつたとはい

玄太 おまんもか？

まつ いくら仕事とはいえ、男と女が同じ屋根の下で夫婦同様に過ごす時間が多くなつたら、情も映るけんね。

玄太 けんねゝ

まつ いつものことやったか？松尾さんが山下先生の家から出てきよつたけんが、声ばかりだが、軽く会釈するだけではにかむように走って行つたとよ

玄太 そげなことがあったや？

まつ あつたですよ。少し心配しとつたやけんが、入院しとるスズさんが不憫で

玄太 もし、そうだとしたら不憫やけんね。そういえば、スズさんが退院してしばらくしてから、今の担当の・・・ほれなんとかさん

まつ 相良さん

玄太 そうそう、祭りの手伝いにきてくれた相良さん。担当が変わつたばい

まつ 松尾さんが変わりたいって云つたんやろか？

玄太 もしかしたらな・・・

まつ 松尾さんもお父さんお母さんを亡くし、弟さんと親せきに引き取られたとば、云うとつた、家族として暮らすことを夢見とつたばい。

玄太 夢見とったか？

まつ 山下先生とのほとんど二人暮らしに幸せを見つけたような気がしたんやなか？

玄太 それもそうばい・・・

まつ スズさんが家に帰ってきて、居場所が無くなった気がしたんかな？

玄太 仕事とは別にな

まつと玄太が山下宅の縁側を眺める

縁側には雨上がりの雲の隙間から陽が差している

第五場 太一宅

太一、スズと雪乃

太一とスズが居間で話している

スズが太一に背広を渡す

太一が奥に行く

太一が奥に行く、スズが掃除をし始めようとする

玄関の開く音がしてスズが玄関に行く

雪乃の声「こんにちは」

スズの声「こんにちは。どうぞ、あがらっさんですか？」

雪乃の声「はぁ・・・」

スズの声「どうぞ・・・」

舞台が暗転し雪乃が一人、中央に立っている

雪乃独白「私が、先生のお宅に伺い、居間に上がるとスズさんが座っていました。私はその時はっきり目にしました。スズさんが・・・。スズさんが先生の手をきつくきつく、つかんでいたことを。私はその場にいたたまれなくなり、立ち去ろうとしました。そして、立ち去ろうとする中、スズさんは悲しい目を、先生は苦悩の目をしていたのです。」

間

やがて、手を放し太一が雪乃の後を追う

取り残されたスズが、雨が上がった空を見上げみている

太一 松尾君 待たんね

雪乃が立ち止まり太一に振り向く

太一 スズが・・・ごめんよ！

雪乃 いいえ・・・当然ですばい

太一 自分がもし、死んだ後んことが不憫で心配でたまらんかった

雪乃 そうかもしれんね

太一 松尾君が救いであり、また、恐れでもあったんやろう

雪乃 恐れだなんて・・・ 奥様にはかないませんばい

太一 そうかもしれん

雪乃 山下先生は・・・山下先生は・・・

太一 自分は・・・

雪乃 きつと、寂しかったんやと思う

太一 そうばい

雪乃 奥様に申し訳なか

太一 半面、スズは、複雑な思いで、ありがたか気持ちもあったんやろう

雪乃 女としては、許せん気持ちちん方が強かはず

太一 それが、スズん葛藤やったはず

雪乃 うちん苦しみでもある

太一 苦しかったとやろうな

雪乃 悪かとは、うちやけん

太一 そうやろうか？寂しさば我慢できんかった自分にも責任があるやろう

雪乃 だばってん、山下先生ば責めとねえ うちや、最初戸惑うたばってん、本心はうれし

かった

太一 そうか・・・

雪乃 身ん回りんお世話ばさせていただきながら、家庭生活にあこがれとった自分の想いが叶うたと、うれしかった

太一 松尾君は、普通ん家庭生活ば知らんで育ったんっさね

雪乃 ええ、懂れやった

太一 家庭ん温かみ感じたんっさね

雪乃 ええ、かすかな記憶・・・。両親が亡くなり、ある日突然、叔父ん内に預けられたけん

太一 叔父さんの家は、居心地がようなかったか？

雪乃 叔父は、ようしてくれたっさ。だばってん、叔母は、しょせん他人の子やった。わが子に比べて、どがんしてん差ばつけてしまうんは仕方んなかばい。

太一 大学まで行かせてくれたんやろ？

雪乃 そりや自分が早うあん家ば飛び出したかったけん。それにあん土地には、住み続けとったく無かったけん、奨学金で東京ん大学に入った。

太一 その後、入社してから叔父さんとは？

雪乃 育ててくれた恩があるけん、年賀状んご挨拶とお歳暮は、欠かさずしとーばってん、家に伺うところまでは。

太一 叔父さんの家では、浸れんものが俺ん家にあつたんやろうな。

雪乃 お優しいか・・・ほんなこつお優しいかばい。

太一 長崎に残る気はなかったんか？

雪乃 それは・・・

と、口を積むんでしまう雪乃

太一 いや、何も言わんでよかばい

太一と雪乃がうつむき

太一が家のスズの方を見やる

第三章 エピローグ

第一場 別れの海と空

波がきらきらと輝き、浜辺に小さな波が打ち寄せてくる

日差しが照り付ける中、沖には小さな漁船が波に揺られながら漁をしている

一人の女性が砂浜に立ち、眩しそうに海を見つめている

相良が、砂浜を静かに雪乃の背後から近よる

少し離れたところから雪乃を少しみつめ立つ相良

相良 松尾・・・そろそろ、駅に行く時間だぞ

雪乃が相良に振り向くことなく海を見つめている

相良は、あきらめたような顔で雪乃を見ている

相良 先生とは、博多本社の編集部が初対面だったっけ？あれからもう、5年か……。長崎に転勤になって3年。月日が経つのは早いな。

雪乃 ええ、あっという間の3年でした。

相良 先生の担当は2年ちよつとか。先生とはうまくやってたんだけどな

雪乃 ええ、先生にはお世話になりました。

相良 そうか、そうだったな。先生のお宅に行くのがたのしそだったものな

雪乃 原稿を受け取るのが私の仕事でしたから

相良 先生の奥様の病状が悪くなって、状況が一変した。

雪乃 ええ、そうでしたわね

相良 奥様を病院から自宅にお連れしたことがあってな

雪乃 そうですか

相良 奥様が家に帰って。開口一番言ったのは……

雪乃 なんておっしゃってました

相良 居場所が無くなったような気がする

雪乃 そんなことを

相良 居間に上がるなり、辺りを見回して小綺麗な部屋の中をみて、先生ではないとすぐに

気づいたようだ

雪乃 そうでしょうね

相良 奥さんがな、鴨居の縁をさつとなでて、すぐに僕をみたんだよ。そしてな、居場所が無くなったような気がするって。

雪乃 ……

相良 でも、怒った様子もなく、むしろ笑顔でな。さっぱりとした顔をしてた。

雪乃 怒ってなかったんですか

相良 ああ、もしかすると……

雪乃 もしかすると？

雪乃、ちらりと、相良の方を見ながら

相良 自分の死期を悟ってるんじゃないだろうか？

雪乃 それが、どうして？

相良 自分の心配事が一つ無くなったからかもな

雪乃 心配ごと？

相良 先生のことだよ

雪乃 山下先生の……こと……？

相良 先生は不器用だからな。飯炊き、掃除に洗濯。どれをとっても普通にできそうにないじゃないか。

雪乃 そうですね

相良 先生のこととは忘れられそうか？

雪乃 ……たぶん

相良 だいたいが……

雪乃 ですが、この海に注ぐ陽は忘れられないと思います

相良 この海か……

雪乃 海は広いですから

相良 ああ、海はな

雪乃 この長崎のことは、心の中で封をしても、この海のことは忘れない

相良 そのことは、自分も心の中にしまっておくよ

雪乃がまた、海の方を見ながら

雪乃 眩しい・・・

間

相良 今日は、天気が良いから日差しが強いからな

雪乃 いえ・・・そうじゃなくて、先生のスズさんが

相良 そういえば、奥様も同じことを云ってたな。松尾のことが眩しいって

雪乃 スズさんがそんなことを・・・

相良 ああ、若くて、病気ひとつもなく元気で、はきはきしてた松尾が眩しかったんだろうな。波の水面にきらきらと光るようだと、云ってた

雪乃 きらきらなんかしてませんわ ただの欲深い女です むしろ、きらきら光ってたのは、スズさんの方ですわ。

相良 そうか・・・

雪乃 女として男の人を愛することも

相良 それは・・・

雪乃 （相良の言葉を遮るように） うらやましいのは私の方ですわ

相良 正直に生きた松尾もある意味、奥様も、うらやましかったんだろう

雪乃 うらやましいなんて

相良 だが、松尾は、こうして人としてのけじめをつけた

雪乃 先生も、望んだことですから

相良 ああ、先生もきちんとけじめをつけた

雪乃 これでよかったですよ。スズさんのためにも

相良 うん

雪乃 スズさんには、かないません でも、スズさんのようになりたい

相良 ああ、眩しいくらいの愛が奥様には、あった。

雪乃 そうですね

相良 時間が解決してくれるかもしれないし

雪乃 そうだったらいいんですけど

間

雪乃が、きらきら光る海の水面と日差しに手をかざす
空を見上げ手に持つ日傘を広げ差す

相良 松尾、その日傘は、確か、奥様と同じ日傘・・・

雪乃 眩しいですわ・・・海に降り注ぐ・・・日差しが・・・
辺り一面の眩しい光

終わり

参考文献 「海と日傘」 松田正隆

松田正隆先生の作品を参考に創作いたしました
厚く御礼を申し上げますと共に感謝いたします